

※ここからは『Z Study 解答用紙編』の国語「評論4 / 用言3 / 再読文字」2枚目に「ご記入ください」。

二

【二】 次の傍線(a)～(e)の語を、例にならって文法的に説明せよ。

(各4点)

例 いとめづらしかりけり。 ↓シク活用形容詞「めづらし」の連用形

(1) かきつばたいと^(a)を^(b)かしく咲きたり。

(2) おと^(b)なく、物知りぬべき顔したる神官を呼びて……

『徒然草』

(3) うつくしき^(c)こと、限りなし。

(4) ただの紙のいと白う^(d)清げなるに、……

『枕草子』

(5) あけぼのの空^(e)朧々として、……

『奥の細道』

【二】 次の文章は『平家物語』の一節で、関東に出陣しようとしている平忠度について、その人柄を紹介するものである。これを読み、あとの問に答えよ。

副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒糸緘の鎧着て、^(x)黒き馬のふとうたくましいに、^{*}沃懸地の鞍置いて乗り給へり。照り輝くほどに出で立たれたりしかば、^(y)めでたかりし見物なり。薩摩守忠度は、年ごろ、ある^{*}宮腹の女房のもとへ通はれけるが、ある時、おはしたりけるに、その女房のもとへ、やんごとなき女房^(a)客人に^(z)来つてやや久しう物語し給ふ。小夜も^(b)はるかに更けゆくまでに、まらうと帰り給はず。忠度、軒端にしばしやすらひて、扇を荒く^{*}使はれければ、宮腹の女房、「⁽¹⁾^{*}野もせにすだく虫の音よ」と^(c)優に^(z)やさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。その後またおはしたりけるに、宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇を使ひやみしぞや」と問はれければ、「いさ、『かしこまし』なんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。かの女房のもとより、忠度のもとへ^{*}小袖を一重つかはすとて、^{*}千里の名残の^(d)悲しさに、一首の歌をぞ送られける。

東路の草葉を分けん袖よりも立たぬ袂の露ぞこぼるる

15

注 *直垂 Ⅱ 武士の平服。

*黒糸緘 Ⅱ 鎧の革札を黒糸で綴り合わせること。

*沃懸地 Ⅱ 漆塗りの上に金粉をまぶしたるもの。

*宮腹の女房 Ⅱ 皇女を母にもつ女性。

*使はれければ Ⅱ (扇を) 手のひらに当てて音を鳴らしなさると。

*野もせにすだく Ⅱ 野原一面に群れをなして鳴く。

*かしこまし Ⅱ やかましい。

*小袖 Ⅱ 肌着の一種。
*千里の名残 Ⅱ 遠く旅立つ人との別れ。

問一 傍線(x) (z)の形容詞の活用形は何か。それぞれ次の中から選び、記号を記せ。(各2点)

- ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形
エ 連体形 オ 已然形 カ 命令形

問二 傍線(a) (d)について、形容動詞には○を、そうでないものには×を記せ。(各2点)

問三 問題文は四つの段落に分けられる。第二・三・四段落はどこから始まるか。それぞれの最初の五字を抜き出して記せ(句読点等も一字として数える)。(各3点)

問四 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。

(i)これは次に示す和歌の一節である。□に入る語として最適なものを文中から抜き出して記せ。(2点)

□ 野もせにすだく虫の音やわれだに物は言はでこそ思へ

(ii)「宮腹の女房」がこの一節「野もせに……」を口ずさんだ目的は何か、説明せよ。(5点)

問題

二

【二】 次の傍線(a)～(e)の語を、例にならって文法的に説明せよ。

(各4点)

例 いとめづらしかりけり。↓シク活用形容詞「めづらし」の連用形

(1) かきつばたいと^(a)をかしく咲きたり。

(2) おと^(b)となしく、物知りぬべき顔したる神官を呼びて……

『徒然草』

(3) うつくしき^(c)こと、限りなし。

(4) ただの紙のいと白う^(d)清げなるに、……

『枕草子』

(5) あけぼのの空^(e)朧々として、……

『奥の細道』

【二】 次の文章は『平家物語』の一節で、関東に出陣しようとしている平忠度について、その人柄を紹介するものである。これを読み、あとの問に答えよ。

副將軍薩摩守忠度は、紺地の錦の直垂に、黒糸絨の鎧着て、黒き馬のふとくたくましいに、沃懸地の鞍置いて乗り給へり。照り輝くほどに出で立たれたりしかば、めでたかりし見物なり。薩摩守忠度は、年ごろ、ある宮腹の女房のもとへ通はれけるが、ある時、おはしたりけるに、その女房のもとへ、やんごとなき女房客人に来つてやや久しう物語し給ふ。小夜もはるかに更けゆくまでに、まらうと帰り給はず。忠度、軒端にしばしやすらひて、扇を荒く使はれければ、宮腹の女房、「(i)野もせにすだく虫の音よ」と優に(z)やさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。その後またおはしたりけるに、宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇を使ひやみしぞや」と問はれければ、「いさ、『かしかまし』なんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。かの女房のもとより、忠度のもとへ、小袖を一重つかはすとて、千里の名残の(d)悲しさに、一首の歌をぞ送られける。

東路の草葉を分けん袖よりも立たぬ袂の露ぞこぼるる

15

注 *直垂 武士の平服。

*黒糸絨 鎧の革札を黒糸で綴り合わせる事。

*沃懸地 漆塗りの上に金粉をまぶしたるもの。

*宮腹の女房 皇女を母にもつ女性。

*使はれければ (扇を) 手のひらに当てて音を鳴らしなさると。

*野もせにすだく 野原一面に群れをなして鳴く。

*かしかまし やかましい。

*小袖 肌着の一種。
*千里の名残 遠く旅立つ人との別れ。

問一 傍線(x) (z)の形容詞の活用形は何か。それぞれ次の中から選び、記号を記せ。(各2点)

- ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形
エ 連体形 オ 已然形 カ 命令形

問二 傍線(a) (d)について、形容動詞には○を、そうでないものには×を記せ。(各2点)

問三 問題文は四つの段落に分けられる。第二・三・四段落はどこから始まるか。それぞれの最初の五字を抜き出して記せ(句読点等も一字として数える)。(各3点)

問四 傍線(1)について、次の(i)(ii)に答えよ。

(i) これは次に示す和歌の一節である。□に入る語として最適なものを文中から抜き出して記せ。(2点)

□ 野もせにすだく虫の音やわれだに物は言はでこそ思へ

(ii) 「宮腹の女房」がこの一節「野もせに……」を口ずさんだ目的は何か、説明せよ。(5点)

二

解答

- (a) シク活用形容詞「をかし」の連用形
 (b) シク活用形容詞「おとなし」の連用形
 (c) シク活用形容詞「うつくし」の連体形
 (d) ナリ活用形容動詞「清げなり」の連体形
 (e) タリ活用形容動詞「朧々たり」の連用形

解説

(a) (c)は形容詞、(d)・(e)は形容動詞である。
 まず、形容詞の活用の種類の見分け方を確認しよう。

動詞「なる」を下につけて連用形に活用させたとき、
 「……く」という形になる 〓ク活用
 「……しく」という形になる 〓シク活用
 例 めでたし めでたくなる 〓ク活用
 あやし あやしくなる 〓シク活用

- (a) 「をかしく」は形容詞の「をかし」が活用したもの。「なる」を下につけると「をかしくなる」と活用するのでシク活用。また、下に「咲き」という動詞(用言)が続いているので連用形である。
 「をかし」は(趣がある・みごとだ)という意味である。現代語とは意味が違うので注意しよう。
 (b) 「おとなしく」は形容詞の「おとなし」が活用したもの。「なる」を下につけると「おとなしくなる」と活用するのでシク活用である。ま

た、この「おとなしく」は連用形で、ここでは文をいったん読点で中止する形になっている。「おとなし」は「大人し」と書いて、(①おとなびている、②思慮分別がある、③年配だ)という意味である。現代語の「おとなしい」とは意味が違うので覚えておこう。

(c) 「うつくしき」は形容詞の「うつくし」が活用したもの。「なる」を下につけると「うつくしくなる」と活用するのでシク活用で、下に「こと」という名詞(体言)が続いているので連体形である。現代語の「美しい」とは意味が違う場合が多いので注意しよう。

次に、形容動詞の活用の種類の見分け方であるが、シンプルに、

・終止形が「……なり」ならナリ活用
 ・終止形が「……たり」ならタリ活用

- と覚えよう。形容動詞のうち、活用語尾がナ行(なら・なり(に)・なり・なる・なれ・なれ)ならナリ活用、タ行(たら・たり(と)・たり・たる・たれ・たれ)ならタリ活用と考えればよい。
 (d) 「清げなる」の終止形は「清げなり」なのでナリ活用である。ここでは「清げなる」と「に」の間に「紙」という体言が省略された形なので連体形である。「清げなり」とは(いかにきれいだ・きちんと整っている)という意味である。
 (e) 「朧々と」の終止形は「朧々たり」なのでタリ活用である。「朧々と」は連用形である。タリ活用形容動詞の連用形は、動詞や接続助詞「て」が下接するときには「……と」の形に活用し、助動詞が下接するときには「……たり」の形に活用する。「朧々たり」とは(おぼろにかすむさま)という意味である。

口語訳

- (1) かきつばたがたいそう趣深く咲いていた。
 - (2) 年配で、物事をわかっていそうな顔をしている神官を呼んで……
 - (3) かわいらしいことは、この上もない。
 - (4) 普通の紙でとても白くきれいな紙に、……
 - (5) 明け方の空はおほろにかすんで、……
-

二二

解答

- 問一 (x) エ (y) イ (z) イ
- 問二 (a) × (b) ○ (c) ○ (d) ×
- 問三 第二段落Ⅱ薩摩守忠度 第三段落Ⅱその後また
第四段落Ⅱかの女房の
- 問四 (i) かしかまし
(ii) 忠度が扇を打ち鳴らすのを制止するため。

解説

問一 (x)名詞「馬」に続いているので、この「黒き」が連体形であることは明らか。

(y)この「めでたかり」の活用形を答えるには、ク活用形容詞の活用表を覚えていなければならぬ。そうすれば、連用形であることがわかる。活用表の左側に記載される補助活用(カリ活用)は、原則として助動詞を下に付けるときに使われるものであり、この場合も、過去を表す助動詞(「き」の連体形「し」)が下に続いている。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
(く)	く	し	き	けれ	
から	かり		かる		かれ

(z)「やさしう」は「口ずさみ給へば」にかかる連用修飾語であるから、ここで使われているのは、用言に続く形、すなわち連用形であると考えられる。本来は「やさしく」であったものが、ウ音便化しているのである。

問二 (a)名詞「客人」に格助詞「に」が付いたもので、〈客人として〉という意味。

(b)形容動詞「はるかなり」の連用形。「静か」「穏やか」のように、形容動詞の語幹は「か」で終わる例が多い。上に「この」が付けられないことから、形容動詞であると確認できる。

(c)現代語では「優美」「優雅」などと言うが、古文では「優」一文字だけで、そうした意味を表す。形容動詞「優なり」の連用形である。これも上に「この」が付けられないことから確認できる。

(d)形容詞「悲し」の語幹に接尾語「さ」が付いて名詞化し、そこに格助詞「に」が付いたもの。「悲しさ」という言葉は現代でも使うので、イメージしやすいだろう。

問三 問題文は次のように四つの場面に分けることができる。

- ①忠度の出陣の様子
(副將軍……めでたかりし見物なり。)
- ②忠度、接客中の女房を訪問
(薩摩守忠度は、年ごろ……使ひやみて帰られけり。)
- ③忠度、後日あらためて女房を訪問
(その後またおはしたりけるに……のたまひける。)
- ④女房、忠度に小袖を贈る
(かの女房のもとより……露ぞこぼるる)

時間の流れから言えば、①の後に続くのは④であり、その間に、①よりも過去の出来事である②③という別々のエピソードが割り込んでくるのである。

よって、それぞれの場面ごとに段落分けをすればよい。

問四 (i)和歌はふつう五七七七という音節で構成されるから、この場合の空欄にも五音節の語句が入るはず。その条件を満たし、かつ「野もせにすだく虫の音」に直結するのにふさわしい言葉を探す。

傍線(1)の発言に関連する部分をチェックしよう。

問題文の「こ」を見よう！

宮腹の女房、「野もせにすだく虫の音よ」と優にやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇を使ひやみて帰られけり。

←その後

宮腹の女房、「さても一日、なにとて扇をば使ひやみしぞや」と問はれければ、「いさ、『かしかまし』なんど聞こえ候ひしかば、さてこそ使ひやみ候ひしか」とぞのたまひける。

宮腹の女房が「野もせにすだく虫の音よ」と優雅に口ずさむのを聞いた忠度は、すぐに扇を鳴らすのをやめて帰ってしまった。後日、再び宮腹の女房のもとを訪れたときに、女房に「あの日はどうして扇を鳴らすのをやめたのですか」と問われた忠度は、「かしかまし」などと聞こえましたから鳴らすのをやめたのです」と答えている。女房が傍線(1)の部分で口にしたのは、この歌の「野もせにすだく虫の音よ」の部分だけなのに、忠度は「かしかまし」などと聞こえました」と言っているということは、この歌の□の部分には、「かしかまし」の語が入るのだと判断できる。

(ii)傍線(1)の発言に至るいきさつを確認しよう。

問題文の「こ」を見よう！

ある時、(忠度が宮腹の女房のもとへ)おはしたりけるに、その女房のもとへ、やんごとなき女房客人に来てつてや久しう物語し給ふ。小夜もはるかに更けゆくまでに、まらうと帰り給はず。忠度、軒端にしばしやすらひて、扇を荒く使はれければ、

宮腹の女房のもとに来た客がなかなか帰らないので、待ちぼうけをくった忠度は、扇を荒っぽく打ち鳴らした。その音を聞いた宮腹の女房が、「かしかまし」で始まる歌の一部を、あえて「かしかまし」の部分を外して口ずさんだのである。これは、(来客中なのだから、うるさくしないでほしい)という意志を伝えるのに、はっきり「かしかまし」などという無遠慮な言葉を投げつけるのははばかられるため、自分の真意を歌に託してさりげなく伝えたのである。「野もせにすだく……」は、有名な和歌の中でそれとセットになっている「かしかまし」を連想させる効果を備えており、そのことを察した忠度は、後日「『かしかまし』なんど聞こえ候ひしかば(『かしかまし』)など聞こえましたので」と語ったわけである。

口語訳

副将軍薩摩守忠度は、紺地の錦織りの直垂の上に、黒糸で綴り合わせた鎧を着て、黒い馬で(しかも)太っていてたくましい馬に、沃懸地の鞍を置いてお乗りになった。照り輝くほどに身支度をなさったので、すばらしかつた見る価値があるものである。薩摩守忠度は、長年、ある皇族出身の女房のもとに(恋人として)お通いになっていたが、あるとき、(女房のところへ)お越しになったところ、その女房のもとに、高貴な

女房が客人にやってきて、少し長時間にわたって話をなさる。夜もずいぶん更けていくころになっても、客人はお帰りにならない。(外で待っていた) 忠度は、軒先でしばらく立ち止まって、扇を強く打ち鳴らしなされたところ、皇族出身の女房が(聞きつけて)「野もせにすだく虫の音(＝野原一面で鳴いている虫の声)よ」と優雅に上品に口ずさみなさるので、薩摩守はすぐに扇を鳴らすのをやめてお帰りになった。その後、(忠度が)またお越しになったときに、皇族出身の女房が、「それにして先日は、どうして扇を鳴らすのをやめたのかしら」とお尋ねになったところ、「さあ、『やかましい』などと聞こえましたので、それで鳴らすのをやめたのです」とおっしゃった。この女房のところから、(関東に出陣する) 忠度のもとへ小袖を一着届けるということで、遠く旅立つ人との別れの悲しさのために、一首の和歌を(添えて) お送りになった。

東路の……(東国へ行く道の草葉を分けて行くあなたの袖よりも、旅立たずに都に残る私の袖のほうが、いっそう涙でぬれることでしょうか)

✓ 語句チェック

年ごろ……①長年の間。②ここ数年来。

やんごとなし……①捨ててはおけない・重大である。②はなはだ尊

い。③なみなみでない・格別である。

客人……よそから訪ねてきた人・客。「まろうど」「まれうと」とも。

やや……①少しずつ・次第に・だんだん。②だいぶ・少し。

やすらぶ……①ためらう・ぐずぐずする。②立ち止まる。

やがて……①そのまま。②ただちに・すぐに。